

園のおたより



第 1 2 号

令和 6 年 3 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園



幼稚園帽子を被った子どもたちが集まって、絵本の世界に入り込んでいる様子を見るのが私の楽しみでもあります。さらに、私自身、先生の読み聞かせを楽しみにしており、絵本の世界に浸っている自分に、「おっと、仕事を忘れてはいけない」と時々反省したりしております。子どもたちは、読み聞かせが終わると、「はやい〜！（読み聞かせが早く終わってしまったので、もっと読んで欲しい）」などと、せがむ様子がいつも見られます。子どもたちは先生の読み聞かせが大好きです。

私の娘は保育園に通園していましたので、おそらく午睡前などに読み聞かせがあったのだと思います。私が保育参加時に、せがまれて午睡前に「おばけの本」を読んだのですが、読み終わった後の余韻が午睡前にはふさわしくない不思議な感じになったことを思い出しました。絵本の選択を間違えたようです。家では、就寝前に娘に「この絵本読んで〜」とせがまれるのですが、読み出すと途中で私が睡魔に襲われ、もうろうとしてストーリーを勝手に変えて話し出し、最後には支離滅裂となり、私が寝てしまいおしまい、となることがほとんどだったように思います。娘が私の読み聞かせについてどう感じていたのか、未だに怖くて聞けません。

けれども、私自身は、幼稚園の先生の本の読み聞かせが大好きだったことを半世紀ぶりに思い出しました。それは、3組さんの読み聞かせを教室の隅で聞いていたときです。3組は1、2組と違って長いストーリーの本を毎日少しずつ読んでいきますので、担当が「続きはまた明日」と言った時でした。卒園を控えた私が「卒園までに、この本は読み終わるのだろうか」、「もう卒園だけど、この本の続きは誰が読んでくれるのだろうか」と心配していたことを思い出したのです。その本の内容は覚えていないのですが、その続きは、未だに誰も読み聞かせてくれないことだけは確かです。続きは自分で読む必要があり、卒園は読み聞かせからのお別れでもあったのです。5歳児クラスのみんなを見ながら、成長していろいろなことができるようになった喜びと、これからいろいろなことを自分でしなければならぬ寂しさと、そんな複雑な気持ちが入り混じっているのかなあ、と想像している卒園前のこのごろです。

